

中井実と創造 2006年 1月号

# キーラン・イーガンの授業論

——斎藤教授学への一照射(1)

宮崎清孝

## 一、驚きの出会い

この一年ほど、あるカナダ人の教育学者の著作にはま  
っている。キーラン・イーガン (Kieran Egan) という、  
カナダはヴァンクーバーの、サイモン・フレーザー大学  
の教授である。

そもそもは昨冬に手術で入院して、その後病院のベッ  
ドに縛り付けられていたときに読んだのがはじめだった。  
そして非常に驚き、またうれしくも思った。退院してか  
らさつそく、何人もの友人たちにこの人の存在について  
メールで知らせたくらいだ。

何がそんなにうれしく、驚いたのかというと、この人  
の仕事は授業をいかに作っていくかという話なのだが、  
それがちよつと大げさないうと斎藤喜博にそっくりなの  
だ。授業をどんなものとするのか、授業を作っていく

とき何を勘所と考えるか、さらにはそれらの背後に見え  
る教育に関する考え方といったところで、斎藤喜博を思  
わせることが大変に多いのである。

もつとも、なぜそんなに私が驚いたかということにつ  
いては説明が必要かもしれない。一口にいうと、私もこ  
れまでいろいろ外国の、といつてもほとんど英語圏だが  
教育関係の著作を読んできていたのだが、そこで斎藤喜  
博を思わせるものにはいっさいお目にかかったことがな  
かったのだ。

私は心理学の出身で、いわゆる教育学についてはさほ  
ど知っているわけではない。自ずと知識範囲も狭いとは  
思うが、ただこれまで、師匠世代の方々からもそういう  
話を聞いたことはなかった。

もつとも、「いっさい」というのはちよつと強すぎる  
表現かもしれない。「事実と創造」の定期的な読者であ  
ればご記憶にあるかもしれないが、私は二〇〇三年に

人的に話す機会はほとんどなかった。ただ「日本にも同  
じような考えを持っている斎藤喜博という人がいる」と  
いうことだけは伝えた。彼も興味を持ったようで、また  
別の機会により個人的な情報交換の機会を持つとうと思っ  
ている。

それはともかく、当然のことだがよりよく知るようにな  
ると違いも見えてくる。ただその違いも、まったく対  
話のしようもない「縁なき衆生」との違いとは違って、  
そこから斎藤教授学の固有の特徴が見えてくるし、そこ  
から斎藤教授学を世界的な地平の中に位置づけるために  
役に立つ積極的なものだと思う。

## 二、イーガンと斎藤教授学の類似点

——授業は物語を語るように作れ

イーガンの簡単な紹介から

というわけで「事実と創造」の紙面をお借りし、イー  
ガンの授業論についての紹介をさせていただこうと思う。  
実のところイーガンのおもしろさを一番理解できるのは  
日本では斎藤学派であると思っている。その意味でも「事  
実と創造」という場はふさわしいと思う。

「なるほどそうだよ」とか「ああ、そんなふうにいえる  
のか」と思わせることが多い。うれしさのあまり、七月  
には発表の予定もないのにヴァンクーバーで開かれた彼  
の主催する学会に行ってきた。今まで海外の学会に自分  
の発表なしに、ただ聞きに(見い?)行ったことはない  
といえ私の興奮の度合いを察して頂けるかもしれない。  
ちなみに、彼はこの学会の主催者で大変に忙しく、個

は一年間アメリカのサンディエゴ、カリフォルニア州立  
大学サンディエゴ校のマイケル・コールの研究所にいた。  
また二〇〇四年にはフィンランド、カヤーニにあるオー  
ルー大学のハッカライネンを訪問した。その都度、教育  
に関する感覚が、斎藤喜博と一緒とまでいえるかはとも  
かく、少なくとも私と一致する同志たちに出会えた。そ  
して実は、何を隠そうこのイーガンという著者に会えた  
のもこの人たち、特にハッカライネンの紹介によつてい  
る。とはいえ彼らはどちらかといえば私同様心理畑であ  
り、一致は感覚、センスのレベルにとどまった。具体的  
な授業のとらえ方、作り方といったレベルでは、やはり  
「いっさい」なかったといつていいと思う。

すでに述べたように、カナダ、ヴァンクーバーのサイモン・フレイザー大学の教授である。イギリス人だが大衆はアメリカのスタンフォードで、元々は哲学者であるようだ。コンピュータ関係の会社に勤めていたことはあっても、いわゆる教師としての実践経験は（もちろん大学の先生として以外の）まったくないらしい。その理論発展史をたどれるほど詳しく読んではまだないのだが、著作から見るとこのほぼ20年間、基本的には同じ教育についての考え方をもち、それを発展させてきている。

何よりも特筆すべきなのは、研究者として研究者向けの活動（理論書を書くとか学会活動とか）をするだけでなく、教師たちに向けて、また教師たちとともに、彼の授業論に基づいた具体的な教材開発の運動をやっていることだ。Imagination and Education Research Group（「想像と教育」研究の会とでもいおうか）という会を組織しているが、これはちょうど教授学研究会の会のようなもので、研究者だけではなく実践者も参加している。前に述べた彼の主催する学会というのも、ふつうの研究者の学会というよりは、実践者も参加し、そのためのワークショップも開かれる、教授学研究会の会の大会に近いものだ。

この会はインターネット上にウェブサイトを (<http://www.wiergenet>) をもち、そこで具体的な教材案を発表したり、また募集したりしている。また彼の著作も、どちらかといえば研究者向けの理論的なものと、どちらかといえば実践者向けの具体的な教材作りについての本の二種類に分かれるようだ。ちなみに斎藤喜博ほどではないが彼も多作。

また、ヴァンクーバー周辺の教育委員会（カナダのシステムについて知らないので正確にどの程度の大きさかわからないが、どうやら州レベルらしい）への売り込み（？）にも成功して、かなりの額の予算を取り、共同研究しているらしい。国際的にもかなり広まっており、前記の学会にはアメリカ、イギリス、オーストラリア、さらには香港などアジアからも研究者が参加していた。

物語としての授業 (teaching as a story telling)

すでに説者の中には、「どこが斎藤教授学と似ているのだ」とお待ちかねの方もいると思う。したがってまずは斎藤教授学と似ていると私が考えるところから、イーガンの授業論についての紹介を始めよう。

私の考えるところでは、次の二つの大事な点でイーガンの理論は斎藤教授学とよく似ている。一つは授業の展開のあるべき姿について。もう一つは教材の構造についてだ。

このような物語は授業にリズムを作る。そして教材を取捨選択していくときには、このリズムに従って内容を単純化、明確化していくことが必要だともイーガンはいう。

子どもは物語を面白がる。物語構造を持った授業も、子どもの気持ちを惹きつけることができる。そこが、物語として授業を作ることが必要である理由である。

さらにいえば、子どもが教材を深く理解するためには、教材の論理的な意味を追うだけではだめなのだ。子どもを教材と感情的に関わらせることが必要だ。教材の内容に感情的に深く動かされ、面白いと思うことが必要だ。

だが現実の多くの授業はそうならないとイーガンはいう。彼によれば今多い授業の作り方は、まず厳密に目標を記述し、次に内容を設定し、さらに方法を決定し、最後に評価がくるというものだ。つまりは機械的な、流れ作業的な授業へのアプローチだ。

他人事ではなく、日本でもよく見かけるそれである。イーガンはこのようなアプローチを、それが子どもを教材に感情的に関わらせることができないう点で批判する。

彼のキーワードの一つは、既に紹介した彼の研究会の

て、あるいは教材と子ども、教材と教師の関係についての考え方の点。まず前者から見ていこう。

イーガンの理論の第一に重要な主張は、授業は物語を語るように作れ、ということにある。

物語とは何だろう。物語の基本的な構造とは何かという問いに対する答えは分かりきったことのようにだが、実は神話や民話といったいわば原初的な物語を分析する中で長く探されてきた難しい問題である。この研究の領域はナラティブ（語り）論といわれ、今では文化人類学や心理学にも大きな影響を与えている。イーガンの研究もそれに基づいているし、それを発展させるものでもある。物語には基本的な構造がある。「発端」「展開」「終末」の三項構造である。

物語ではまず何か問題、謎、葛藤がおこる。それが物語の発端である。それを解決しようとして、物語は展開していく。そして最後に、終末にたどり着く。葛藤は解決される場合もあるし、新たな葛藤へと展開していく場合もある。後の場合には、新しい物語がそこから始まる。

授業を物語のように作るときにも、まず何らかの葛藤とか、劇的な緊張を作り出さなければならぬ。それによつて子どもの中に、期待とか、謎とか、恐れとかが生じる。それを解こうとしていくことで授業が発展する。

名前にも使われている「想像力」である。実は私自身はこの言い方にあまり感心しない。というのは日本の教育界でもよく使われるこの言葉は、どうも意味がはっきりしないからだ。イーガンの場合にもその傾向はあるのだが、少なくともその一つの意味は、ここで批判の対象としている「機械的、流れ作業的」ではないもの、子どもの感情を引き起こすことができるような授業、あるいはそこで引き起こされる子どもの心の状態、ということだろうと思われる。

## 二項対立

ところで物語の発端となる「問題」「葛藤」はどのようなものであり、どうやって作られるのか。

イーガンによれば、「問題」が存在するのは何かについて「二項対立」、つまり「○○だ」という主張と、「○○ではない」という主張の間の対立が作られるときだ。たとえばシンデレラという物語には、「いい」少女シンデレラと「悪い」継母がいて、そこに対立がある。その二つがぶつかり合うことで後の話が展開する。

物事をわかっているためには、まず対立する二つの項に分けてみるといいとイーガンは考える。「ある・ない」「暖かい・寒い」「高い・低い」「いい・悪い」というよ

## 斎藤の場合——葛藤とその克服

どうですか。斎藤教授学をつくりましょう。

読者の中には斎藤喜博については私以上の理解をお持ちの方が多だろうから、よけいな付け足しかもしれないとは思いますが、このイーガンの主張に対応する斎藤の発言を引いてみよう。なお以下、引用は特に断らない限り「教育学のすすめ」からのものである。

斎藤教授学の中でもっとも基本的な授業観だと私が思っているのは、授業では子どもを「葛藤を経験させ、それを乗り越えさせなければならぬ」という彼の主張である。そしてそれが、イーガンの「物語としての授業作り」論に対応すると思う。たとえば次のような発言。

「優れた授業は、一時間の授業の流れの中に必ずリズムがあり旋律があり、音色のようなものがある。また、衝突・葛藤があり、衝突・葛藤の結果として生まれる発見がある。」

あるいは、

「授業はいつでも、そのときどきの追求課題や追求過程が、明確で単純なものになっていなければならない。」

これらの言葉の中で想定されている「葛藤」→「追求」→「発見」という授業展開の構造がイーガンのいう物語

うなものが二項対立の簡単な例だ。もちろんこれは出発点なので、ここから認識は発展していく。物語の終末で、二項対立のどちらか一方が正しいとして残り、もう一方は誤りとして捨てられる場合もあるだろう。二つの項のどちらでもなく、その中間に落ち着いていく場合もあるだろう。さらには解決して終わってしまうのではなく、そこからまた新しい二項対立が生まれていく場合もあるだろう。そのような進展がつまりは物語の進展である。

二項対立を使って理解をする、などというといかにも抽象的で高度の認識のように思えるかもしれない。しかし実のところ物語を楽しめるような年齢の子どもたちは皆このやり方で理解することが可能だとイーガンはいう。たとえば「いい」「悪い」とか「勇氣」「怖い」といった二項対立は、シンデレラのような童話のみならず子どもが楽しむどんな物語の底にもあるもので、だからこそ子どもはこれらのおはなしに惹きつけられるのだという。

したがって子どもにある教材を教えようとするときには、そこにある二項対立を探していかなければならない。その上で、そこからどのようにして物語を発展させていくのかを考えることが、授業を組織していくことになる。それによって、教材が子どもにとって魅力的なものになる。

であることについては、特に説明はいらぬと思う。

さらに二項対立については、斎藤はそれを「矛盾」とか「対立」とかいった言葉でいっていると私は考える。

授業の「展開」についての彼の発言から、たとえば次のようなものはどうだろうか。

「教材と教師と子ども間に矛盾が起こり、対立とか衝突・葛藤とかが起こり、それを超えることによって、教師も子どもも新しいものを発見し、創造し、新しい次元へ移行していくようなものでなければならぬ。」

ここであるいは、「斎藤は矛盾が、教材と教師と子ども間の間にある」といっている。だがイーガンのいっているのはもっぱら教材の中だけについてではないか」という反論があるかもしれない。

まずいっておけば、ここでたとえば「教師と子どもの間の矛盾、対立」というのは、斎藤教授学の場合にはなによりも教材の把握の仕方、つまり教材の解釈を通してのものであるということだ。「ゆさぶり」に典型的なことだが、子どもが教材についてある(常識的な)解釈を持つている場合に、それとは対立する(常識を超えた)解釈を教師がぶつけることで、子どもと教師は対立していくことになる。それがここで、「教材と教師と子どもの間」と、三者関係の問題として対立を描いている理由

だろう。つまりここでも矛盾、対立は基本的には教材をめぐる解釈、つまり教材の中にある。

というわけで基本的には齋藤教授学とイーガンの考えは類似したものだと私は考える。ただしそういつてすぐに付け加えておかなければいけないが、齋藤がここで矛盾対立を、「教材と教師と子ども」という三者間関係の中にあるものとしてとらえたことにはやはり積極的な意味があることも確かなのだ。それが実は、齋藤教授学の固有の、そして世界的な地平でみて教育研究に寄与できるところにつながっていると私は考えている。だがこれについては後で述べる。(続く)

注：イーガンの著作について

この文章で紹介しているイーガンの考えは次の五冊による。

- 1988 Primary understanding: Education in early childhood. Routledge.
- 1989 Teaching as a story telling: An alternative approach to teaching and curriculum in the elementary school. The University of Chicago Press.
- 1998 The educated mind: How cognitive tools shape our understanding. The University of Chicago Press.

- 2002 Getting wrong from the beginning: Our progressivists inheritance from Herbert Spencer. John Dewey, and Jean Piaget. Yale University Press.
- 2005 An imaginative approach to teaching. Jossey Bass.

なお日本語訳として、

塩見邦雄(訳) 『教育に心理学は役立つかーピアジェ、ラトンと科学的心理学』(勁草書房)  
があるが未読である。

(早稲田大学)

☆

★

☆